平成28年度(2016年度)
日本特別活動学会　第3回　実践事例募集事業

推　奨　実　践　事　例

事例番号　3－6

生徒も教員も主体的に取り組む学級力向上プロジェクト
―　学級力アンケートの活用　―

堺市立三原美原中学校　　奥　田　雅　史

実践テーマ	生徒も教員も主体的に取り組む学級力向上プロジェクト ～学級力アンケートの活用～
実践区分 ○囲み	(学級活動・ホームルーム活動)　(児童会・生徒会活動)　クラブ活動　学校行事 その他(具体的に、　　)
実践事例の背景、ねらい、意義など	全国的に若手教員の増加傾向が見られる近年において，学級担任のほとんどが20代で占めることもめずらしくない。本校においても例に漏れず，ほとんどの学級担任が20代で，なれない教科指導に加えて，部活動や校務分掌と多くの業務に追われ，特別活動を効果的に指導する余裕がないのが現状である。また，教科書などの教材がないことや，先輩教員からの指導の引継ぎがうまくできていないことなど特別活動が効果的に行われていないのも課題であるといえる。 これらの現状や課題から，学級担任などが新たに特別活動の内容などを考え実践を行うよりも，すでにある行事などに向けて学級としてどのように取り組むべきかを生徒自身に考えさせることで，短い時間でより効果的に特別活動を行うことができると考え，学級委員会を中心に「学級力アンケート」を行った。 学級力アンケートとは早稲田大学の田中博之教授がこどもたちが学級づくりの主人公となって，目標達成力・対話創造力・協調維持力・安心現実力・規律遵守力からなる学級力を高めるために，自分たちの学級の様子をセルフアセスメントすることができるツールとして開発されたものである。 （田中博之氏編著「学級力向上プロジェクト（金子書房）」より） 本報告では，生徒自らが学級の現状を主体的に判断しながら，学級という社会をどう描くかを考えさせ，課題を解決していくためには何が必要かを話し合わせた実践と，その過程において担任として学級を一緒に作り上げていく中で特別活動の意義や方法を学級担任も主体的に取り組んでいった様子を合わせて紹介する。 田中氏も「全国的に見ても学年としてこれだけ取り組んでいる学校はない」とお声かけいただいたので，本実践が多くの特別活動に悩む若手教員の参考になればうれしい。
実践の時期	平成28年9月～平成29年2月（現在も継続中）

【実践事例】（成果と課題を含む）

（1）学級力アンケートの実施にあたって

平成28年度1学期においては，総合学習を中心に防災についての学習を学年として取り組んだ。学習を進める中で，生徒は家族の命の大切さや地域で取り組む防災へと多くの人と関わりあっていく必要性を感じていった。一方で，1学期も終わりに近づいたころ，自分たちは地域や社会に目を向けているが，小さな社会である学級は本当に困ったときに助け合える関係になっているか，と学級委員を中心に話し合うようになっていった。

夏休みに「学級力アンケート」に出逢った私は2学期が始まるとすぐに，学級委員会に提案すると，学級委員は学級力アンケートを使った取り組みを始めたいと意欲を見せた。

（2）「学級力アンケート」と「スマイルタイム」の実践

学級力アンケートの大きな特徴は生徒自らがアンケート結果を見て，クラスの様子を分析することにある。班長会議や学級委員会などでクラスのアンケート結果を分析し，今後のどのような取り組み（スマイルアクション）ができるかを話し合う活動（スマイルタイム）を行うことにある。

本実践では，スマイルアクションを既存の学年行事や学校行事にリンクさせることで，「学活」の時間を改めて設定せず，効率的に行うことを意識した。また，スマイルタイムとして使う時間も，「朝学習」や「終学活」を活用することで，生徒や教員への負担とならないよう配慮した。

具体的には，スマイルタイムとして学級力アンケートの結果は，まず学級委員会でクラスの良い点と改善すべき点の2つに分け，分析した。また，このとき合わせて学年としての分析も行った。その後学級担任と相談し，どのようにクラスでスマイルタイムを行うかを考えさせた。すると，あるクラスは学級担任と相談し，学級でスマイルタイムを行うことができた。また，あるクラスはスマイルタイムの前に，班長会議を開き，さらに細かい分析を行うこともできた。また，別のクラスでは体育大会を通してどのように取り組むかというスマイルアクションにおいて，体育委員や体育大会リーダーと話し合う場を新たに設定し，取り組むことができた。

さらに，あるクラスでは普段の学校生活からクラスをよりよくするために定期的に班長会議を行い，体育大会や合唱大会などの行事に向けては，別のリーダーの会議を開催するなど，まさに生徒が主体的に学級をよくするために，別のアプローチから複数のスマイルアクションを考え，取り組むことができた。

体育大会や合唱大会という行事は，生徒はもちろん若い教員は単発の取り組みだと誤解することが多く，行事の結果などにはこだわり，前向きに取り組もうとするが，一方でクラスの現状や課題が見えず，結果にこだわりすぎるあまり，かえってクラスとしてよくな

い方向にいってしまうことは少なくない。しかし，これらの行事をスマイルアクションとして位置づけ，取り組んだ結果，生徒はもちろん，学級担任もクラスの現状を見つめなおしながら，あくまで行事を通して，クラスをよりよくしたいと考え，クラスの現状に応じたスマイルアクションを主体的に考えることができた。ある担任は班長会議を定期的に行えるよう曜日を設定して呼びかけたり，別の担任は会議で生徒がスムーズに話し合えるようレジュメを作成したりと，まさに主体的にスマイルタイムをよりよいものにすることで，行事というスマイルアクションを結果だけにこだわらず，達成感や団結力を重視することができた。

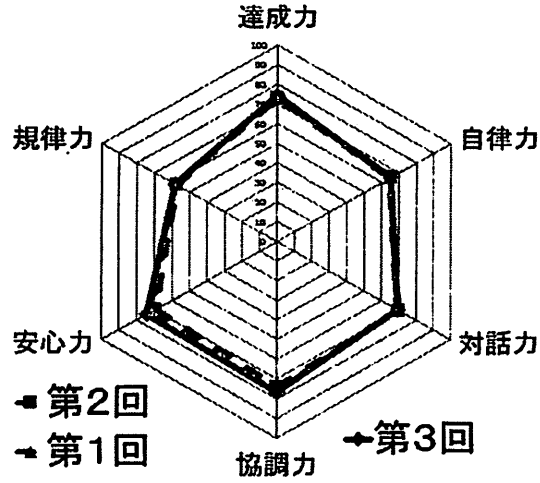
(3)成果（学級力アンケートの結果より）

あくまで生徒によるセルフアセスメントであるので，数値の議論はすべきではないが，教員から見ても学習や生活での「規律力」には課題があるという意見が多くある。このことから，きちんと分析できていること自体が一つ目の成果であるといえる。

また学年としてみると回を重ねても大きな変化はないが，２年生の２学期という一般的に中だるみするといわれる時期に，生徒自身が「学級が少しずついい方向へ行っている」と感じていることも大きな成果であるといえる。

(4)成果（生徒の変容と外部からの評価）

実際に，スマイルタイムとしての班長会議が多く開かれてるようになったことや，学級委員会において各クラスの情報交換を行うことで，互いを参考にして新たに取り組みを始めるなど話し合い活動が活発になった。さらに，合唱大会に向けて学級力を高めようと学級委員が有志に呼びかけ作成した学級新聞が大阪中学校新聞連盟主催の第59回学級新聞発表会において２クラスが「佳作」を受賞した。これは，新聞のレイアウトなどの技術ももちろんだが，短評として「記事がクラスを大切にする内容で統一されていて記事を書いた人の思いがよく伝わってくるいい新聞です。」や「アンケートの結果からしっかり考えて意見を書いていたり，とても完成された記事です。」とクラスの今までの活動や，アンケートなどから自分たちを客観的に見る力が身についたと考えられる。



【学年のアンケート結果】

(5)今後の課題

多くの生徒がクラスの現状をセルフアセスメントできるようになり，よりよいクラスにするために何が必要かを考え，話し合うなど取り組むことができた。今後はより多くの生徒を巻き込み，クラス全員で取り組めるようにしていきたい。

また，セルフアセスメントであるがゆえに，行事の結果により大きく左右されたと感じた。合唱大会後の２つのクラスの結果を見ると，合唱大会で「金賞」「銀賞」を受賞したクラスは，多くの項目でポイントが上がっている。一方，僅差で賞を逃してしまったクラスは「やりきった」という達成感はあるものの多くの項目でポイントが下がってしまった。

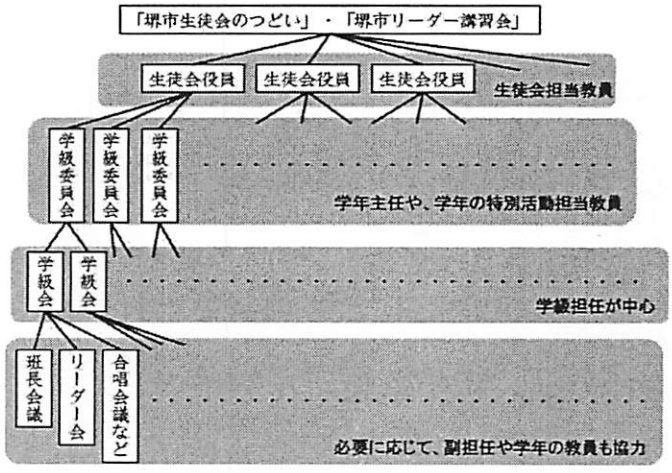
あくまで，コンクールなので結果は大切だが，学級力アンケートにおいてもその結果に大きく左右されてしまい，きちんとクラスを分析できなくなってしまったことが課題であるといえる。今後は，「たとえ結果にでなくとも頑張れた点」や，「結果は出たが悔いの残る部分があった」などとさらに，客観的にとらえる姿勢をはぐくんでいきたい。

(6)おわりに

今回の実践では，生徒が主体的に学級力について取り組むことで，若い学級担任も一緒に成長し，特別活動を指導できるようになったことが大きな成果であるといえる。この報告が全国の若い教員に少しでも参考になれば，多くの学校で特別活動が効果的になるのではないかと考える。

しかし，本実践においては筆者のようなある程度，特別活動について試行錯誤している教員がイニシアティブをとる必要があるが，そのような教員が各校にいるとは限らない点が大きな課題であると考えている。

そこで，筆者は現在，同様の実践を堺市内の 43 中学校の生徒会役員を対象に「学校新聞」や「はがき新聞」を通して，学校をよくするためにどのようなことができるかを生徒に考えさせる実践※1に取り組んでいる。これにより，各校の生徒会担当の教員が特別活動を効果的に指導できるようになれば，その教員が学校や学年に本報告を参考に実践を行うことで堺市として多くの若い教員が特別活動を行うことできると考えている。



【堺市で特別活動を効果的に行う際のイメージモデル】

【参考】

※1　堺市では 50 年以上前より堺市内の全中学校の生徒会役員を対象に，夏は１泊２日の宿泊研修，冬には半日の講習会を実施している。筆者は昨年度の夏より運営委員として関わっており，一つの分科会の講師として３回，新聞分科会を担当した。（詳細は別紙参照）